

日本史 A、日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の追・再試験は、「世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察させる」という学習指導要領の目標に沿い、基礎的・基本的な学習内容をもとに、歴史的思考力を問う良問が出題された。

一方、難易度や設問形式などについて一層の配慮をお願いしたい箇所も見られた。

以下、今年度の追・再試験の問題について本試験に準じて(1)～(4)の視点で分析を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領（標準 2 単位）に準拠し、教科書の内容や授業実態に即した形式・難易度・内容の問題であったか。
- (2) 「日本史 A」設置の趣旨を生かした「世界史的視野に立った理解」や「歴史的思考力」を評価する問題であったか。
- (3) 時代別・分野別出題範囲のバランスがとれていたか。
- (4) 出題方法や表現などが適切であったか。また、60 分の試験問題としてふさわしかったか。

2 試験問題の形式・分量・難易度・範囲

- (1) 設問形式では（表 1）、昨年度と比べ「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」の設問が 7 題（19 点）から 11 題（31 点）に増加し、一方「二つ以上の文章の正誤の組合せ」の設問が 10 題（30 点）から 7 題（21 点）に減少した。それ以外は昨年度とほぼ同様で、全体的に見てバランスの良い出題であった。
- (2) 全体の分量は、大問 6 題、設問数 34 題で、昨年度と同様である。また、第 3 問と第 5 問の計 12 題（35 点）が「日本史 B」との共通問題であった。正答を導くのに複雑で時間のかかるような問題もなく、例年並の適切な分量であった。
- (3) 難易度については（表 2）、昨年度の難易度指数 3.26 が今年度は 3.44 となり、難化したと分析できる。設問ごとの難易度を昨年度と比較してみると、今年度は「標準的な問題」が昨年度より 3 題増加し、20 題と半数を超えたものの、「難しい問題」が 3 題増加した一方、「やや易しい問題」が 3 題減少した。全体的には難易度が上昇したと考えられる。

追・再試験の設問形式（表1）

（ ）内は配点

設 問 形 式	平成25年度	平成24年度	平成23年度
正しい事項(人名・単語など)を選択	1題 (3点)	0題 (0点)	1題 (3点)
誤った事項(人名・単語など)を選択	0題 (0点)	0題 (0点)	0題 (0点)
二つ以上の事項(人名・単語など)の組合せ	11題 (31点)	7題 (19点)	6題 (18点)
正しい文章を選択	9題 (27点)	10題 (30点)	4題 (11点)
誤った文章を選択	3題 (9点)	3題 (9点)	8題 (24点)
二つ以上の文章の正誤の組合せ	7題 (21点)	10題 (30点)	11題 (32点)
古いものから(年代)順に配列	3題 (9点)	4題 (12点)	4題 (12点)
	34題 (100点)	34題 (100点)	34題 (100点)

追・再試験の難易度（表2）

丸数字は「日本史B」との共通問題

	問 題 番 号	問題数	前年比
難しい問題	3、⑪、②④	3	+ 3
やや難しい問題	2、6、14、15、16、17、②⑩、②②、②③、32	10	- 3
標準的な問題	1、4、5、8、9、⑩、⑫、⑬、18、⑬⑨、②①、②⑤、②⑥、 27、28、29、30、31、33、34	20	+ 3
やや易しい問題	7	1	- 3
易しい問題		0	± 0
難易度指数（難しい順に5～1の指数を与え、平均値を算出）		3.44	+ 0.18

（委員の合議により、教科書で扱われているかという観点のほか、現場における授業の実態、受験者の実態を考慮し、問題ごとの難易度を5段階に分類した。）

(4) 出題範囲を分野別に見ると（表3）、「政治」、「外交」の設問は合わせて19題（57点）から10題（28点）へと大幅に減少した。一方、「社会・経済」、「文化」は合わせて8題（23点）から13題（39点）と増加した。受験者が比較的苦手とする「社会・経済」、「文化」が昨年度より増加したため難化したと予想される。「世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などに関連付けて考察させる」という学習指導要領の目標を鑑みると、「外交」の分野の出題が2題と少ないように見えるが、他分野との関連での出題も含めると9題であり、十分目標を達成した出題といえる。また、今年度は「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた出題が11題（33点）と、昨年度より4題増加し、多いように見えるが、史料問題から派生させたものもあり適量であったといえる。時代別に見ると、近世後期からバブル経済期までと学習指導要領の範囲内で出題され、どの時代もバランス良く出題されており、適切な出題であったといえる。全体的に時代別、分野別に横断した設問が多く出題されている。

追・再試験の時代別・分野別出題範囲（表 3）

②は 2 点問題、他は 3 点問題

区 分		政 治	外 交	社 会 経 済	文 化	史料・グラフ 地図・図版等	問題数 (配点)
歴史と生活	衣食住の変化	1 ②			2	3	3 題 (8 点)
	交通・通信の変化						0 題 (0 点)
	現代に残る風習と 民間信仰						0 題 (0 点)
	産業技術の発達と 生活						0 題 (0 点)
	地域社会の変化						0 題 (0 点)
19 世紀 近代日本の 形成と 世界	国際環境の変化と 幕藩体制の動揺				8		1 題 (3 点)
	明治維新と近代国 家の形成	7				6 4 5 9	5 題 (15 点)
	国際関係の推移と 近代産業の成立	14 17	15		11	12 16 18	9 題 (27 点)
国際関係 近代日本の 歩みと	政党政治の展開と 大衆文化の形成	19 ②			21 23		3 題 (8 点)
	近代産業の発展と 国民生活			27			1 題 (3 点)
	両大戦をめぐる 国際情勢と日本	29 30		20 28	24	22	6 題 (18 点)
第二次世界大戦後の 日本と世界	戦後政治の動向と 国際社会			25 33		31	4 題 (12 点)
	経済の発展と国民 生活				32	34	2 題 (6 点)
	現代の日本と世界						0 題 (0 点)
問題数 (配点)		8 題 (22 点)	2 題 (6 点)	8 題 (24 点)	5 題 (15 点)	11 題 (33 点)	34 題 (100 点)
24 年 度		13 題 (39 点)	6 題 (18 点)	5 題 (14 点)	3 題 (9 点)	7 題 (20 点)	34 題 (100 点)
23 年 度		12 題 (36 点)	6 題 (18 点)	7 題 (21 点)	4 題 (10 点)	5 題 (15 点)	34 題 (100 点)

3 試験問題の内容・表現・程度

第1問 「日本史A」の主題学習である「衣食住の変化」をテーマとした問題

父親と高校生の娘の会話形式のリード文を読み、幕末から1970年代までの「衣食住の発達と生活」について考察させる設問である。コンパクトな内容ながらも「政治」、「外交」、「社会・経済」、「文化」の全ての分野を網羅しており、図版と表も効果的に用いられ、主題学習の狙いをうまく反映させた設問となっている。問1のアは文章から識別しやすい反面、イは鈴木三重吉が判断ポイントとなるために難易度が高いように見える。しかし、リード文から大正時代の事象を問う設問であることが分かる。リード文をしっかりと読ませる意味でも良問であった。問2は明治初期から昭和初期までの生活様式について問う内容で、文化史であるために悩んだ受験者も多かったと思われるが、大正文化を象徴する事象を出題しており、時代感覚を問う点でも良問である。問3は表を用いて戦後の「政治」、「外交」、「社会・経済」、「文化」全般を扱った良問である。ただし、資料の読み取りに年代が求められるなど複雑な問題であるために受験者にとっては難しかったと思われる。

第2問 近世後期から明治前期の「政治」と「外交」をテーマとした問題

Aは大道芸の「ちょぼくれ」の歌詞をもとに、幕末の政治、外交情勢を読み解く問題である。問1は史料の読み取りが求められるが、(注)が丁寧であり、受験者にとって解答への糸口となったと思われる。選択肢も基礎・基本の内容で、条約の内容や国内外の情勢を問う良問であった。問2も史料から判断できる良問であり、このような史料問題を今後も積極的に取り入れていただきたい。問3のⅢは分かりやすいが、Ⅰ・Ⅱは関連性が薄いため戸惑った受験者も多かったと思われる。

Bは木戸孝允の生涯をもとに、幕末から明治初期における「政治」、「外交」、「文化」に関するリード文を読み解く問題。問4は幕末の老中と明治新政府の版籍奉還についての「二つ以上の事項(人名・単語など)の組合せ」問題である。標準的な良問であり、政治史であるために、受験者は自信を持って選ぶことができたと思われる。問5は幕末から明治初期の教育についての基本的問題であり、受験者にとっては識別しやすかったと推測できる。問6は世界地図をもとに日本と欧米諸国等の関わりを立体的に問うた良問であり、世界史的視野に立った出題は「日本史A」の目標に合致しており評価できる。

第3問 横山源之助の生涯をテーマに明治初期から大正初期までの「政治」、「社会・経済」を問う、「日本史B」第5問との共通問題

問1はしっかり学習しておけば自信を持って答えられる基本的な問題で、「社会・経済」における労働運動史の重要性を認識させる良問である。問2は明治前期の文化からの出題である。各選択肢とも文化史の細部の知識を求めているために難問であり、リード文中に受験者の支援となる内容をもう少し織り込んでおくなど工夫がほしかった。問3は日清戦争前後の東アジア情勢にかかわる都市を問う問題。地図上で朝鮮や中国の主要都市の位置を確認する問題で、基礎的事項を問う良問である。地図を用いた設問は、これまでの高校側の要望が十分反映されたものであり、今後もぜひ出題していただきたい。問4は明治期の社会経済からの出題。「日本史A」で押さえるべき歴史的事象が各選択肢に取り入れられている基本的な問題である。

第4問 明治期の政商をテーマとした問題

Aは政商の誕生からその成長について述べたリード文を読み解く問題。問1はお雇い外国人の業績についての問題である。「日本史A」としては教科書の細部からの出題で、知識偏重の内容であり、やや難しい問題である。頻度が低いものは出題工夫が必要ではないか。問2は明治期の外交政策の「古いものから（年代）順に配列」する問題である。明治外交の重要事項を扱った良問であるが、事象間の関連性が乏しいため受験者にとっては難しく感じたと思われる。問3は主な官営事業の払下げ先についての「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」問題であった。表を用いてはいるものの教科書の細部からの出題で知識偏重となっている。思考力を問う問題にするなど工夫がほしかった。

Bは政商岩崎弥太郎による三菱の成長についてのリード文を読み解く問題。問4は岩崎弥太郎に因んだ「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」問題であるが、空欄イは年代から解答を導く必要があるなど細部の知識を受験者に要求しており、やや難しい感が否めない。問5は「明治期の高額所得者」に関する問題である。設問のXは表から素直に読み取ることがができるために受験者にとって易しく感じたであろう。Yはリード文から岩崎が三菱の創設者であることが分かるので正答にたどりつける良問である。

第5問 幕末から現代までの人の移動をテーマとした、「日本史B」第6問との共通問題

Aは幕末から大正期までの「政治」、「外交」、「社会・経済」に関するリード文を読み解く問題。問1は護憲三派内閣と日本が獲得した領土についての「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」である。空欄アは基本的用語であるが、空欄イは「沿海州」が聞きなれない用語のため、消去法によっても「南樺太」を正しく選ぶことができたのではないかと推測される。問2は明治末期から大正期にかけての外交問題についての「古いものから（年代）順に配列」である。受験者にとってⅡの位置付けがやや難しいと思われるが、世界史的視野に立った出題であり、その後の世界情勢を正しく理解する上でも重要な事象を扱っており良問である。問3は日本人と近隣地域の人々との接触に関する標準的な問題であり、同じアジア人として今後も回避できない大切な問題である。教育現場としてもしっかり指導すべき学習内容である。

Bは大正末期からアジア太平洋戦争にかけての「外交」、「社会・経済」、「文化」に関するリード文を読み解く問題。問4は大正期から昭和初期にかけての日本人が関わった都市と地域を問う問題。地図を用いた点では第3問の問3と同じであるが、地図とリード文が有効的に機能しており、多角的に思考させる点で良問であった。問5は大正期から昭和初期にかけての文化からの出題であるが、やや知識偏重のために受験者にとって難しく感じたと思われる。先ほども指摘したように、このような問題の場合、リード文に解答を支援する工夫が必要ではないか。問6は昭和初期から戦時期にかけての社会経済からの出題であり、良問ではあるが、経済学の理解に立脚した問題であるために受験者にとっては難しかったと推測される。

Cは戦後の「政治」、「外交」、「社会・経済」に関するリード文を読み解く問題である。問7はアジア太平洋戦争後の社会・外交からの出題であり、特に「日米安全保障条約」と「サンフランシスコ平和（講和）条約」という重要な学習テーマの正確な理解を問うという意味で良問であった。問8は戦後の占領政策全般を問う良問であった。情報量は多いが、誤文が分かりやすいため受験者は十分対応できたであろう。

第6問 大正・昭和期の電力事業をテーマに「政治」、「社会・経済」に関する問題

Aは1910年代から30年代前半までの電力事業の成長と、産業の発展に関するリード文を読み解く問題。問1は大規模水力発電事業と新興財閥についての「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」である。空欄アは基本的な事項であり、さらに明らかな誤りとわかる「諏訪」を取り上げるなど問題の難易度が高くないような配慮が感じられる。空欄イも1920年代後半以降の社会・経済を正しく理解しておけば正答できる問題である。問2は浜口内閣が実施した経済政策からの出題である。当時の時代把握を問う基本的問題であり、選択肢③と④が明らかな誤文と分かるため、基礎力があれば十分対応できる。

Bは日中戦争から1950年までの電力政策の変遷と社会の移り変わりに関するリード文を読み解く問題である。問3は国家総動員法と財閥解体に因む「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」問題である。空欄ウ・エともに基本的事項であり、受験者にとっては分かりやすかったと思われる。問4は問3を受けて、国家総動員法の基礎・基本を問う標準問題である。幅広い時代観を問う設問であり、良問である。問5は占領期の図版（写真）を選択する問題であるが、図版の横には「書き出し」があり受験者への配慮が感じられる。時代感覚があれば自信を持って解答できると思われる。

Cは高度経済成長期から石油危機にかけての、日本の主要エネルギーの移り変わりに関するリード文を読み解く問題である。問6は高度経済成長期の文化についての「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」である。Yは総合雑誌『キング』が誤文であることで判別しやすいと思われるが、Xは日本放送協会の設立と高度経済成長期の始まりの時期が同じ1950年代であるために、判断に迷った受験者も多かったと推測される。問7は1950年後半から1960年代前半にかけてのエネルギー革命に関する問題である。四大公害や太平洋ベルト地帯など中学時の学習内容も活用すれば十分対応できる問題であり、良問である。問8は1950年代から1980年にかけての水力・火力・原子力の「総発電量の推移」について、グラフを参考に読み解く問題である。aの石油危機とbの高度経済成長期の時期については、リード文から特定することができる。cとdについても、aとbを参考にある程度推測することが可能である。このような、洞察力や思考力を教育現場においても育成しておくことが必要である。経済成長と並行して総発電量も増加したことが分かる良問である。

4 要 約

前文で述べた(1)～(4)の視点についての意見・要望を記すことにする。

- (1) 今年度の「日本史A」の追・再試験は、表2の難易度をもとに本試験と比較した場合、標準的な問題が多かったものの難易度指数に差はなかった。したがって、本試験の平均点が41.64点であったことを考慮すると、追・再試験も厳しい結果に終わったと推測できる。出題範囲は近世後期から1980年代のバブル経済期までであり、適切であった。昨年以上に図版や史料を活用した問題が増えたが、これは多面的・多角的に考察し判断する能力を図る意味で、高く評価できる。さらに、第6問の問2のようにリード文を精読することで正答を導き出せる良問も見られた。設問内容は高等学校学習指導要領に準拠し適切であった。
- (2) 「世界史的視野に立った理解」という観点では、外交分野からの出題が昨年より4題減り、2

題となった。しかし、外交に関する内容まで含めた場合、昨年の10題に対して今年が9題であるため大差がなく、「日本史 A」の主旨に沿った内容であったといえる。さらに問題の難易度も「やや易しい問題」から「難しい問題」まで幅広く出題され、バランスがとられた構成となった。「歴史的思考力」の観点からは「史料・グラフ・地図・図版等」を用いた設問が11題であり、昨年よりも4題増えたことは評価できる。特に第2問の間6や第3問の間3、さらに第5問の間4のような地図を用いた設問が増えたことは、昨年の高校側の要望がしっかり受け入れられたものと評価できる。また、それぞれの地図問題が異なった歴史的思考力を試す出題形式となっていた点も評価できる。一方、昨年度は文学史について暗記を前提とする設問の是正を要望したが、今回も第3問の間2にその類が見られたのは残念であった。

- (3) 分野別では「政治」、「外交」、「社会経済」、「文化」のすべての分野でバランスよく出題されていた。「政治」が例年度と比べ若干少なく、「社会・経済」が多かったことも難易度を高めた要因と考えられるが、全体的に分野を横断した幅広い思考・判断を求める設問が多く評価できるものであった。さらに、時代区分別にみた場合も、昨年に比べてバランスが良かった点を指摘しておきたい。
- (4) 出題方法や表現については、「二つ以上の事項（人名・単語など）の組合せ」問題が11題とここ最近の中では最も多かった点が特徴である。また、第6問の間1アの「諏訪」のように明らかに誤りだと分かる問題もあったが、第5問の間4のようにリード文と問題が関連しあう良問もあった。「古いものから（年代）順に配列」問題については事象間の関連性が希薄であるために問題の難易度が上がったと予想される。是非改善をお願いしたい。また、基本的事項の年代の知識は確かに必要であるが、今年度の問題も細部の知識の暗記を前提にするものがある。この状況が続けば、教育現場での知識偏重を助長する恐れがあるために検討を強く希望する。出題数は昨年度と同様34題で、60分の試験問題として適切であった。

日 本 史 B

1 前 文

基礎・基本的な歴史的事項の知識をもとにして、受験者の理解力・歴史的思考力を問うとともに、事象の背景や本質を、国際環境と関連付けて考察させようという姿勢がみられた。高等学校段階での学習到達の程度を適切に測るための工夫がなされていたと大いに評価できる。しかし、内容や設問形式、難易度等について配慮をお願いしたい箇所もみられた。その要点を次の3点にまとめた。

- ① 旧石器時代から現代までバランスよく出題されており、要求されていた知識も、ほぼ高等学校の授業で学習する基礎・基本的な事項であった。また、各時代の特徴及び歴史的事象の推移や変化、あるいは出来事の背景に対する理解を問う適切な内容であり、今後とも継続していただきたい。
- ② 設問形式では、昨年度同様、今年度も事項（人名・単語）を選択する設問はなかった。受験者にとって取り組みやすい空欄補充問題が増加した一方、正しい文章の組合せを選択させる問題は減少した。また、一見難しそうにみえても、リード文や設問文の中に正答を導くための配慮がなされており、特にリード文には出題者の強いメッセージが込められていると感じた。また、受験者を困惑させるような表現上曖昧な設問が見あたらなかった点は、受験者への配慮として高く評価できる。
- ③ 資料の取扱いでは、史料や写真資料が、教科書にはほぼ掲載されている受験者にとってなじみ深いものであった。絵図は見慣れないものであったが、新たな資料提示により歴史的事象を空間的に認識させようという配慮や工夫がなされていた。ただし、資史料・図表の取扱いが昨年度の11題から7題に減少したことは、学習指導要領の趣旨からやや後退した感がある。

このように、高等学校「日本史B」の学習成果を評価する問題として、①の基礎・基本的な事項をもとに、時代の特徴及び歴史的事象の推移・変化や背景を問う姿勢や、②の設問形式と学習内容の程度のバランスや配慮、③の資料の取扱いにおいて受験者にとってなじみ深いものを活用することなど、高く評価できる点については、今後も作問の在り方に継続して反映していただくことを強く希望したい。

今年度の大学入試センター試験（追・再試験）の問題の検討評価に当たっては、本試験に準じて行った。

（注）文中で具体的に取り上げる際は、解答番号で表記した。

例 15＝解答番号15の設問

2 内 容・範 囲

今年度の追・再試験は、理解力や歴史的思考力を問う姿勢を継承するとともに、事象の背景や本質を問い、国際環境との関連を視野に入れて考察させる、高等学校学習指導要領（以下、「学習指導要領」という。）の目標に即しての出題であった。また、出題者からの強いメッセージを感じさせるものもみられた。しかしながら、内容の取扱いや出題形式について検討していただきたい点も

ある（「 」内は学習指導要領からの引用語句である）。

(1) 出題傾向

出題傾向について、時代別及び分野別の視点からそれぞれ概観すると次のようなことが言える。

時代別では、今年度は旧石器時代から現代まで大変バランスよく出題されている。表1にみられるように、縦方向、横方向ともに矢印が多い。本試験に比べると時代を縦断する問題が多く、分野を横断する問題がやや少ない傾向があるが、全体としては、各時代の特色と時代を超えた大きな流れの両方をとらえさせる出題となっている。また、昨年度、中世の出題がやや少ないことを指摘したが、中世の設問も5題から8題に増加し、改善されている。

分野別では、全体的な出題バランスは、昨年度よりよくなっている。ただし、近現代においては、労働・社会問題、社会思想に目を向けさせる出題が多くみられ、やや偏りが感じられる。また、史料・写真・地図・表・系図から受験者に考察させる出題が、昨年度の11題から7題に減少したことは、学習指導要領に記されている「様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させる」というねらいからは、やや後退したように思える。しかし、絵図や地図資料の読み取りを通して、歴史を空間的に把握する力を測るなどの工夫がなされるとともに、第6問のリード文では、アジア太平洋戦争という実際に戦闘がなされた地域に即した呼称が用いられたことを評価したい。

(2) 「歴史の考察」を意識した出題

第1問は、「時代ごとに区切らない主題」を設定し、古代から近代までの日本経済の歴史をテーマとした出題であった。しかし、各設問においては、時代を縦断したものがほとんどみられなかったことは残念であった。第3問における[13]は、中世の貨幣経済の進展を、リード文とあわせて「東アジア世界の動向と関連付け」て判断させた意欲的な問題であった。[16]は、15世紀の朝鮮への主要な輸出品を問うているが、これも、日本銀が主な輸出品となるのは16世紀以降の南蛮貿易の時期からであるという大局が理解できていれば、判断を助けることができた。ただし、第1問が経済を主題としたテーマ史でありながら、第3問も中世の経済・産業を取り上げたことについては、出題のバランスに対する配慮を求めたい。

一方、第4問の[19]は、近世のキリスト教の禁圧と鎖国に関する設問であったが、イギリスはプロテスタントの国であり、スペイン・ポルトガルとは異なり、布教活動を行っていなかったことを考えれば正答を判断できた。

第6問は、近現代の日本をめぐる人の移動に関するリード文から、双方向の移民の推移とともに、現在の日本の姿勢をも浮き彫りにしていた。中でも[30]は、明治末期から大正期にかけての外交の特徴を、国際関係と国益及び人種問題という視点から考察させていた。「(1)歴史の考察」の「イ歴史の追究」には、「我が国と外国との交流や相互理解などに着目して、外国人が日本をどう見ていたか、また日本人が世界をどう見ていたかについて追究させる」とある。これらは総じて、学習指導要領のねらいに沿って、基礎・基本的な事項の定着を測る良問であるとともに、歴史を単なる過去の出来事とせず、現代につながるものとしてみてほしいという出題者のメッセージを感じさせる。

時代別・分野別出題傾向（表1）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

区 分		政治	外交	社会 経済 交通	文化 思想 宗教	資史料 図絵 地図	出題数・配点 () 内は24年度 [] 内は23年度
原始・古代	先土器時代			8			7 題 20 点 (10 題 28 点) [8 題 22 点]
	縄文時代			7 ↓			
	弥生時代		↑	↓			
	古墳時代		9		↑		
	飛鳥～ 白鳳時代		↓	↑	↑		
	奈良時代	1 ↓	↓	↑		11	
	前期 平安時代 中期	↓ ←	←	↓ 12 ↑	↓	10	
中世	院政時代		←	↓	←	14	8 題 22 点 (5 題 14 点) [8 題 22 点]
	前期 鎌倉時代 後期			↓ 13 ←		2	
	南北朝時代	15 ↓		↓			
	前期 室町時代 後期	↓ 18 ↑	16 ↑ 17 ↓	↓ ↓	←	3	
	織豊政権時代		19	←	←		
近世	前期 江戸時代 後期	21 4	← ←	20 →	↑ 5 ↓ 24 ↑	22 ↓	8 題 21 点 (7 題 20 点) [7 題 19 点]
	明治時代 前期 後期		← ↑ ↑	↑ 6 ↓ 25 ↓ 28 ↓	26 ↓	27	
近代	大正時代	31 ↓	30 ↑	↓	33 ↓		11 題 31 点 (11 題 30 点) [9 題 25 点]
	前期 昭和時代 大戦期	29 ↓	↑ ↑	↑ 34 ↓	↓	32	
	戦後～占領期	36	35 →	↓			
現代	高度経済成長期 ～現代						2 題 6 点 (3 題 8 点) [4 題 12 点]
25年度出題数・配点		8 題 21 点	6 題 17 点	9 題 26 点	6 題 16 点	7 題 20 点	36 題 100 点
24年度出題数・配点		11 題 32 点	5 題 13 点	5 題 13 点	4 題 12 点	11 題 30 点	(36 題 100 点)
23年度出題数・配点		8 題 23 点	1 題 3 点	12 題 35 点	10 題 24 点	5 題 15 点	[36 題 100 点]

(3) 理解力・歴史的思考力を重視する姿勢

「日本史 B」の目標の一つである「歴史的思考力を育成する」ために大切なことは、出来事の背景やその本質を理解させることである。そのためには、歴史の展開を「総合的に考察」させ、多面的な理解力や歴史的思考力を培う必要がある。そのことを強く感じさせる出題がみられた。

[23]は、江戸時代の元禄、享保、寛政という時代的な流れと、各時代で活躍した人物とを、分野を超えて判断させる複合的な設問であった。[29]も、加藤高明が護憲三派内閣を組織したという基本的知識と、南樺太・沿海州という地理的な空間認識が求められる良問であった。

[31]は、植民地下の台湾・朝鮮人が強いられていた皇民化政策の目的を理解しているかが測られていた。同様に[36]も、戦後、GHQによって、思想・言論の自由が認められる反面で、占領軍に対する批判は厳しく検閲されたことが理解できていれば、正答を判断することができた。

(4) 内容の取扱い

[8]は、本試験では取り扱われなかった旧石器時代から縄文時代への社会変化に関する基本的事項を判断する設問であり、各時代のバランスを考慮した作問への配慮を評価したい。[28]は、近代の産業と労働問題を選択肢に取り上げ、我が国の資本主義が成立する過程を多面的、多角的にとらえさせる良問であった。

3 分量・程度

本年度の追・再試験は、昨年度の追・再試験、今年度の本試験と同様に大問6題、小問36問であった。60分の試験時間を考慮すると、分量としては適切であると言える。ページ数は29ページ(昨年度28ページ、本試験31ページ)、また各設問で提示される選択肢や組合せ問題の文章等、解答にかかわる文章が2行にわたるものが23文であった(昨年度36文、本試験43文)。文章の正誤を選択する形式の問題において、選択肢の文章がすべて2行に及ぶ設問は1問だけであり(昨年度2問、本試験3問)、情報量が増した本試験に比べても、受験者が読み取るべき分量としては、やや抑えられたと言える。

試験問題の程度に関しては、[26]の『人権新説』、[24]のケンペルの著書『日本誌』と志筑忠雄の「鎖国論」との関係については、やや細かな事項と思われたものの、全般的には基本的な設問が中心であった。[1]で問われた租・庸・調・雑徭・防人といった古代の税負担、[3]の天文法華の乱と山城の国一揆は、いずれも押さえておくべき基本的事項である。[4]、[7]、[18]、[21]で問われた、江戸時代の経済政策、古代の社会・文化、応仁の乱と三管領・四職、慶安事件と殉死の禁止についても同様である。[6]は、明治期の経済を金融制度の変遷という視点から考察させる設問で、全体の流れが理解できていれば、個別の年代等を覚えていなくても正答を導くことができる良問である。[25]の横山源之助の『日本之下層社会』と労働組合期成会も、労働運動を学ぼう会で欠かせない重要事項である。このように基本的な知識の理解や学習の到達度を測る姿勢は、センター試験の趣旨に沿うものとして評価したい。

4 表現・形式

(1) 設問形式

設問形式を分類すると表2のようになる。昨年度に比べて、正しい文章の組み合わせを選択す

る形式が減り、空欄を補充する形式が増えた。文章の正誤を選択する設問は12問であったが、正文を選択させる形式が7問であり、誤文選択とのバランスもいい。6択形式の年代配列問題は昨年度同様5問であり、全体としては設問形式のバランスはよかったと言える。ただし、検討を求めたいものとして、次の2点を挙げたい。**15**は、建武の新政における政策として『大内裏の造営計画』を正答として選ばせているが、細かな事象であり、ほとんどの受験者が消去法によって判断せざるを得なかったと思われる。**12**は土地制度に関する選択肢の中に、②のみが軍団・衛士の記述であり、他の選択肢と比べて違和感を感じる。**15**同様、選択肢に工夫を求めたい。

設問形式（表2）

表中の白抜き数字は各2点、それ以外は各3点

設 問 形 式		平成25年度		平成24年度
		問題数	問 題 番 号	問題数
事項（人名・単語）を選択する形式		0		0
文章の正誤を選択する形式		12	1 、 3 、 9 、 12 、 15 、 18 、 20 、 24 、 26 、 28 、 34 、 36	11
二つ以上 文章の組 合せ	空欄を補充する形式	8	4 、 7 、 10 、 13 、 19 、 25 、 29 、 35	6
	文章の正誤の組合せを選択する形式	5	2 、 8 、 16 、 21 、 31	5
	年代配列を選択する形式	5	6 、 11 、 17 、 23 、 30	5
	正しい文章の組合せを選択する形式	2	22 、 33	4
	関連事項の組合せを選択する形式	4	5 、 14 、 27 、 32	5
		36		36

(2) 表 現

リード文や選択肢は全体的に読みやすい配慮がなされており、曖昧な表現はみあたらなかった。

9では、古墳時代中期の出来事として卑弥呼、楽浪郡、後漢というように三重の誤りを配した丁寧な配慮がみられた。同様に**20**では、17世紀前半の金融・商業について『①江戸に銅座、秤量貨幣である寛永通宝』、『②朱印船貿易で巨大な富をつくった三井家、大名貸』というように、誤文中に複数の誤りを盛り込むことにより、受験者の判断を容易にさせている。

(3) 図表や写真等の扱い

資史料・写真等を扱う設問は7問であった。内訳は史料が2問、写真が1問、地図が3問、絵図が1問である。**2**は受験者にもなじみ深い『永仁の徳政令』であり、史料を素直に読み取り、内容を理解すれば正答を導き出せる。学習指導要領に示されている「資料にふれる」ことの大切さを感じさせる設問であった。**10**は、三善清行が記した『意見封事十二箇条』の初見の部分からの出題であったが、読み取った史料の内容と基本的な歴史的知識とを結びつけて考えさせる設問であり、歴史的思考力を活用させる良問である。**11**は図説資料集等で受験者がよく目にする仏像ばかりで各時代の文化を代表しており、配列すべき対象としてふさわしかった。

14、**27**、**32**は地図からの出題で、歴史を空間的に把握していく力が必要とされており、

高等学校側に「我が国の歴史と文化を、各時代の国際環境や地理的条件と関連付け」て理解させることの重要性を示唆するものであった。22は、扇形の『出島』のみならず『唐人屋敷』も描かれた絵図を用いた意欲的な出題であった。しかし、絵図の中に『出島』、『唐人屋敷』の用語がそのまま書き込まれており、読み取る力を測るものとはなっていなかった。題材が興味深いものであっただけに残念に感じる。また、選択肢 c の『Y（出島）は、当初ポルトガル人を収容するために造られた。』という知識は、センター試験で求められる正答として、適切かどうか疑問である。本試験の評価でも述べたが、消去法で正答を導き出すことになる設問については、再検討をお願いしたい。

文字資料ばかりでなく視覚資料を積極的に取り入れ、写真・地図・絵図といった様々な資料から「歴史の展開」を「総合的に考察させ」ることによって、多面的な理解力や歴史的思考力を測ろうとする問題作成部会の姿勢を高く評価したい。なお、今年度は表・グラフを用いて、その原因・背景・推移を考察させるような設問がみられなかった。このようなデータ分析を必要とする良問が作り出されることへの期待も、あわせて述べておきたい。

5 要 約

(1) 高等学校の授業への影響

本試験と同様に学習指導要領に準拠した作問構成となっていることに対し、問題作成部会の姿勢に敬意を表したい。世界の中の日本というグローバルな視点から歴史を考察する力を測る良問が多くみられ、地図を用いて、歴史を空間的に把握していく力を必要とする出題がなされたことは、高等学校側に「各時代の国際環境や地理的条件と関連付け」て理解させる重要性を示唆するものであった。また、この4年間、本試験では出題がみられていない旧石器時代から縄文時代への社会変化に関する問いが設けられており、各時代のバランスを考慮した作問への配慮を評価したい。

多くの設問は、基本的な知識の理解や思考力、学習の到達度を測る、センター試験の趣旨に沿う良問であったが、一部には細かい事項に踏み込んだと言える設問も見られた。受験者は、正答とされる内容については、必修事項と判断せざると得ず、消去法で導き出すことになる設問については、再検討をお願いしたい。

(2) 意見・提案等

「(1)歴史の考察」の「イ歴史の追究」には、「時代ごとに区切らない主題を設定」とあり、それを反映した出題がなされていた。全体を通してバランスに優れ、「国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う」という「日本史B」の科目としての目的に沿うものであった。そして、ただ語句や表面的な事象を覚えるだけでなく、その意味や事象の背景、政策の意図や取り巻く国際情勢など、本質となる部分を理解することの重要性を改めて感じさせた。また、リード文が非常によく練られており、設問とあわせて、歴史を単なる過去の出来事とせず、現代につながるものとしてみてほしいという出題者のメッセージが伝わるものであった。

最後に、これからもセンター試験の問題作成部会と高等学校側との対話を通じて、問題内容についてより一層の工夫がなされ、さらなる良問が作り出されることを期待したい。